

神戈陵を渡る風2

令和4年度 川辺高校 校長通信 第095号(通算)

令和5年3月17日(金)発行

3月になり、間もなく春分(今年は3月21日)、18日から24日まではお彼岸となります。古来、このお彼岸の期間中に、お墓掃除とお墓参り、お仏壇のお参りとお供え、他家へのお参りとお供えの3つのことをするものとされてきました。このときのお供え物のなかに、「ぼた餅」と「おはぎ」があります。どちらも餅米とあんこを使用したお菓子ですが実は同じものです。牡丹(ぼたん)の花が咲く春には「ぼた餅」、萩(はぎ)の花が咲く秋には「おはぎ」と季節によって呼び名が変わるそうです。

二十四節気 春分

3月20日～4月3日頃

今日は、二十四節気というと、啓蟄(けいちつ、3/5～3/19頃)です。来週の月曜日からは、春分へと変わります。昼と夜の長さがほぼ同じになる頃で、この日を境に夏至までの間、徐々に日脚が延びていきます。桜の開花情報もこの頃から聞かれるようになり、本格的な春の到来となります。

3月21日(春分の日)に、お寺ではお彼岸の法要をお勤めします。正確には、春分の日を中日として、その前後3日、合計7日の期間をお彼岸と呼び、この時期に、人々はお寺やお墓にお参りをします。こんな風にお彼岸に法要をしたり、お墓参りをするのは、日本だけの習わしなのだそうです。そして、春分の日は「自然をたたえ、生物をいつくしむ日」として国民の祝日に定められています。

多くの出会いや別れがあり、新生活が始まるなど変化が多いのもこの時期です。

旬のもの

野菜	土筆(つくし)
さかな	帆立貝(ほたてがい)
花	チューリップ
お菓子	桜餅(さくらもち)
言葉	暁と曙 (あかつきとあけぼの)



暁(あかつき)は夜が明け始める前のことであり、夜の終わる頃とも言われています。

曙(あけぼの)は夜が明け始め空が明るくなり始める頃です。

曙は「夜が明ける」と「ほのぼのと明ける」という言葉が組み合わさってできた言葉だそうです。

※「二十四節気」の紹介は、日本の季節を楽しむ暮らし「暦生活(にほみせいかつ)」のWebページの記事を引用して紹介しています。

校長 散策

二月下旬

川辺の清水公園には、清水磨崖仏という仏教遺跡があります。今は三つの梵字が読み取れますが、元は五つの梵字が逢ったとされ、崩落によって2つの文字が失われたといわれています。これらの遺跡の最も古いものは、平安時代末期頃製作だそうです。実は、鹿児島には、ここ以外にも梵字を彫り込んだ板碑等の遺跡がいくつかあります。今回は、始良市蒲生町にある**竜ヶ城磨崖梵字**を見に行ってきました。



山間の奥に見える岩肌に沢山の梵字が彫り込んでありました。一つ一つの文字が仏様を表しているそうです。



ちょうど川津桜が満開で、メジロが花の蜜を吸っている姿も見ることが出来ました。



川辺にもある掘ってあった梵字が、蒲生にもあるなんて、不思議な気がします。地元では、「聖仏」(ひじりぼけ)と呼び、昔から信仰されていたそうです。古石塔研究の権威・黒田清光氏の調査によると、梵字の数は1,700にもおよび1ヶ所にまとめられたものとしては日本最多の磨崖梵字であるといわれています。

義弘公は、秀吉の朝鮮出兵の活躍で「鬼島津」と呼ばれるようになります。そこで、帰国する際に、帰りの船旅は、行きと異なり積載量が軽くなって安定しないため、船の底荷として使うために持ち帰った、重い石臼や手水鉢などが、敷地内に説明文と共に置いてあります。

続いて、始良市加治木町にある**精矛**(くわほこ)神社も訪問しました。この神社は、前に紹介した島津忠良公(日新斎)の孫で、戦国時代最強の武士の一人である島津義弘公をご祭神として祀っており、ゆかりの小径があります。



義弘公は、朝鮮に行く時に時を知るために7匹の猫(猫の目の瞳孔で時を憶測した)を連れて行ったとされます。その時のうち2匹の猫(ヤスとミケ)は無事帰国し、鹿児島市磯にある仙巖園に「猫神社」として祀られています。鬼島津とまでいわれた猛将の義弘公ですが、意外にも猫が大好きだったそうです。